

『経営に役立つヒント』

令和八年二月一日

第二百七十三号

日本も、そろそろ「独立国」日本らしい、日本の伝統や文化の特徴を出した経営をする時期に入ったのではないだろうか。

グローバルゼーションや、マネーゲームにうつつをぬかし、コンプライアンスだ、ガバナンスだと日本的経営をすっかり忘れて、株価や配当を優先し、そこに働く人間を軽視して来ました。ぬくもりやさしさは、どこかに忘れ去り、計算高い冷たい無機質な職場にしてみました。

エヌビディア一社の時価総額が、日本の全産業のGDPをはるかに超えるという、馬鹿げたことになっています。それを、おかしいと思う心も無くしているのです。

日本の中小企業は、約三百二十万社と云われています。軽薄なアメリカのコンサルタントが、この企業数を三分の一にすれば、生産性が上がるとほざいています。

当に、人間を疎外した、仕事を金儲けの手段としてしか見ていない発想です。

違うのです！この三百二十万社の、社長一人一人が、日本を支える柱になっているのです。だからこそ、私は、中小企業の社長に、誇りを持って欲しい。自信を持って欲しいと、訴え続けているのです。

一月号の「クライテリオン」「農」を語るに、農業の公的役割に目を向けよ、を読んで、当に、我が意を得たりと、感動しました。

農業政策の究極の選択として、百ヘクタールの田んぼを①一農家で百ヘクタール作るのと

②一ヘクタールの百農家で作るのと、どちらが正しいと考えるのか、という質問です。

たしかに一農家で百ヘクタールの田んぼを作る方が効率的で生産性が上がります。しかし、九十九の農家がいらなくなり、その職を失います。地域の人口が減少し学校が無くなり、農協もいなくなり、地域のお祭りや文化・伝統を守る人もいなくなります。

猟師は、捕った獲物に対して、また自然に対して、塩や酒を供え感謝を捧げます。供養も忘れません。それが伝統であり、文化であり、日本人の本来の姿です。

大きく言えば、資本主義の終焉なのでしょう。と言って、中共やロシアのような言論の自由も、法律もない、監視国家の独裁国は、まっぴらごめんです。

回りまわって、日本の出番が来たのです。敗戦でのGHQの呪縛から、自らを解き放ち、皇室を戴く日本の、我々中小企業の社長が、立ち上がる秋です。

まさに、「草莽崛起」の秋です。令和八年は、楽しみです。

今月のポイント

日本の伝統・文化・歴史に

立脚した経営をしましょう。

